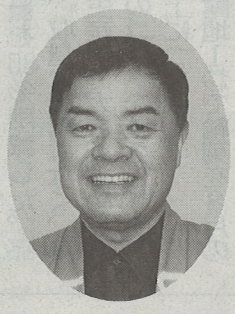
コラム おりおり



特定非営利活動法人
UNE代表理事　家老洋

年寄りの知恵に期待

地方創生と集落の今後

新潟県中越地震の発生から12年。被害が大きかった中山間地域やインフラは復旧・復興したかのように見えるが、人口は激減し、高齢化は進んだ。「今後、村はどうなるのか」「自分はどうなるのか」と住民は大きな不安を抱えている。

数年前に「地方創生」という期待できる新語が出現した。しかし、これまでは掛け声ばかりで、具体的な政策・施策は示されていない。

過日、地元の長岡市では、長岡市長と新潟県知事の同時選挙が行われた。市長選でも知事選でも、地方創生や地域創生が各候補の公約として踊っていたが、人も浮動票も少ない山間の集落には、街宣車も候補者も訪れることは少なかった。一方、村民たちは「地元が政治に忘れられてはならない」という意気込みで、市街地で開催された推薦候補者の個人演説会に、車をやりくりし、多数で押し掛け、前の席で一生懸命に応援をした。

選挙は、得票数の多寡で当落が決まるので、選挙戦は人が多い大都市を中心に展開される。大都市中心の公約が優先され、得票数の少ない集落は、何もしてもらえないと諦めるしかない。こういうことを認識させられた選挙でもあった。

これまで何百年間も、しっかりとした村のコミュニティーで運営されてきた神社・仏閣や集会場、農業施設、村普請、そして村の組織体制などの維持・継続は、過疎・高齢化で人的にも経済的にも困難となっている。閉村に向けて準備を始める集落も少なくない。今まさに、「閉村するか、もうひと踏ん張り頑張って次の世代に村をバトンタッチするか」の判断を迫られている。

借金大国、日本の政治や行政に今後、「山間の小さな集落に、何かしてもらうこと」を期待することは時代錯誤である。政治や行政、社会に対して地元から具体的な施策を提案し、新しい動きを創設することが真の地方創生だと思う。

年を取り、夢も希望を抱けない高齢者ばかりが住む集落かもしれないが、もうひと踏ん張りし、長年蓄積された年寄りの知恵を絞り出し、村としてもう一花咲かせてもらうことを期待したい。

（家老さんの次回掲載は12月8日です）